

追悼 秋間美江子さん



山野井孝有さんからの訃報メール

2020年10月29日 12:36

みなさま

秋間美江子さんが、10月25日、アメリカ・コロラド州ボルダーで永眠されました。93歳でした。

私が秋間美江子さんと最後に言葉を交わしたのは、9月17日午前10時、ボルダーからの電話でした。美江子さんの長女・ヒロコさんから「母が、どうしても山野井さんに電話したいと言うので電話しました。母に代わります」

美江子さんは、「山野井さん、何も食べられなくなったの……。山野井さん、兄のスパイの汚名を晴らすために一生懸命やってくれてありがとう。テレビ・新聞でも取り上げられありがとう。日本の皆さんありがとう……」

何度も繰り返し、蚊の鳴くような声で「ありがとう」と。再び代わったヒロコさんに、この日の午後、

娘と息子が来るので午後1時に電話してほしいと伝えました。娘と息子が同じ日に私の家に来ることは稀です。「虫が知らせた」とはこの事でしょうか。午後1時、ボルダーからの電話で娘と息子も美江子さんと話すことが出来ました。何か危篤の知らせを受けた親族と最後の面会のようなでした。

美江子さんは、戦後75年の今もなお“スパイの妹”として異国のボルダーに暮らしてきました。もう二度と日本に来ることはできなくなってしまいました。コロナウイルス禍で私たちがボルダーに行くこともできません。

戦争の残酷、悲惨さが、いまなお続いているのです。私はこれからも「戦争反対!」と叫び続けます。電話で話したヒロコさんと長男の妻・啓子さんの鳴咽が今も耳に残ります。

秋間美江子さん死去

「スパイの家族」に苦しむ

日米が開戦した1941年12月8日にスパイ容疑で逮捕され、戦後27歳で亡くなった元北海道帝大生の兄、宮沢弘幸さんの無実を訴えてきた秋間美江子さんが、移住先の米国で亡くなった。93歳だった。いわれのない「スパイの家族」の汚名に生涯苦しんだ。「こんな悲しい家族をもつてくれないで」と常々訴えていた。【青島頭】

秘密保護法廃止訴え

東京生まれ。秋間さん 数人が突然家に上がり
んによると、14歳で女 込み、外国語の本やレ
学生だった41年、警官 コードを壊した。尾行



最後の来日となった2016年12月、取材に答える
秋間美江子さん―新宿区で



18歳の宮沢弘幸
さん―遺族提供

され、石を投げられた
こともあったという。
理由は兄。進学して
札幌にいた兄は当時の
軍機保護法違反に問
われて特高警察に逮
捕された。米国人講師
夫妻に情報を漏らした
とされたが、主な容疑
は公然と知られていた

海軍飛行場の場所を教
えたことだった。懲役
15年の判決で服役。戦
後「骨と皮」のように
なつて出獄、2年もた
ずに結核で亡くなっ
た。

兄の死後も一度付け
られた烙印におびえ続

け、65年に夫とともに
米国に移住した。

80年代後半に体験を
語り始め、国家秘密法
案（廃案）の再提出に
反対。2013年の特
定秘密保護法成立を危
惧し、14年に病身を押
して来日。札幌や東京

で講演して「自分と同
じように苦しむ人をつ
くってはいけない」と
国が「秘密」を決める
恐ろしさを訴え、同法
廃止を訴えた。16年に
も来日した。

家族ぐるみで付き合
った千葉市の山野井孝
有さん(88)は「氣力で
お兄さんの汚名をそそ
ごうとした。もう少し
生きてほしかった」と
話した。

毎日新聞 2020年10月30日

毎日新聞・青島頭記者は、一貫して「宮澤・
レーン・スパイ冤罪事件」についての取材・
報道を続けています。

特に、秋間美江子さんについては、201
4年6月15日（日）付、毎日新聞の「スト
ーリー」で、詳しく紹介しました。
（次ページ参照）

北海道のレーン・宮沢事件

兄は特高にとらわれた

「スパイ」の呪縛70年



毎日新聞 2014年6月15日・朝刊 <ストーリー>

5月も半ばとはいえ、北国はまだ肌寒かった。早朝6時すぎ、札幌市の円山墓地に米国在住の秋間美江子さん（87）の姿があった。その白い御影（みかげ）石の墓碑には、「LANE」とあった。「また来ました」。70年前にあったつらい思い出が浮かんで消えた。帽子の造花を取って、墓の前に手向けた。

日米開戦の1941年12月8日のことだ。美江子さんの兄、宮沢弘幸さんは北海道帝国大2年の時、この墓に眠る米国人英語教師のレーン夫妻とともに、思想警察、特別高等警察によって軍機保護法違反で連行された。「レーン・宮沢事件」である。弘幸さんは軍の秘密をレーン夫妻を介して米国に流したとされるが、「秘密」とされたことは当時既に周知の事実だった。

無実を訴えた弘幸さんだったが、確定判決は懲役15年。網走刑務所に送られた。敗戦で釈放され、静岡の疎開先に戻ったときは骨と皮だけになっていた。1年半後、病死した。亡くなる前「何があったか書く」と訴えたが、かなわなかった。



「秘密保護法が通ったというのに、なんでみんなは無関心でいられるのかしら……」。秋間美江子さんの表情は暗かった

＝東京・西新宿にある宮澤家の菩提寺・常圓寺で、小川昌宏撮影

「スパイの家族」とされた者も塗炭の苦しみを味わった。特高の影におびえ、石まで投げられた。戦後も心の傷は消えなかった。美江子さんは移住した米国でやっと安息を得た。けれども時に恐怖がよみがえる。

札幌を訪れたのは、兄の母校であり悲劇の舞台となった北大で、事件を知る最後の証言者として昨年成立した特定秘密保護法の廃止を訴えるためだった。講演の終盤。参加者から家族の苦労を尋ねる質問が出たときだった。美江子さんの顔がみるみるうちに真っ赤になり、涙があふれた。「もう誰にも会いたくない」と宿舎にこもった。

事件から70年以上が経過するというのに、呪縛はいまだに解けていない。

◇日本離れ「救われた」

「今だって、こんな悲しい話はやめてしまいたい。思い出したくはないんです。一度スパイの『色』をつけられてしまうと……」

秋間美江子さん（87）は話す。22歳の北海道帝国大生だった兄、宮沢弘幸さんが札幌で特別高等警察に連行されたのは1941年12月8日。その数日後の出来事は脳のひだに染み込んでいる。

美江子さんは当時、14歳の女学生。東京・初台の自宅で、下の兄と留守番をしていた。突然、警官がなだれ込んできた。棒で天井を突き回し、手当たり次第に外国語の本を破り、レコードを壊した。「そんなに大人数でないはずなのに7人も8人もいるような気がして泥棒より怖かった。ぶるぶる震えていました」

幸せだった生活は一変した。いつも後をつけてくる黒コートの男の存在に気づいた。友人と入ったあみもの店から出た時、定期券を忘れて家に戻ろうとした時……。どこから

伝わったのか、何者かに石を投げられたこともあった。工場勤務の父に連れられ、一家は住まいを転々と変えた。

次兄晃さん（故人）は、学徒出陣の壮行会で在校生代表として送別の辞を読み上げるはずだった。けれども直前になってはずされた。「スパイの弟」というのが理由だった。

弘幸さんが収監された網走刑務所を母とくさんと何度も訪ねたが、面会はかなわなかった。待遇を少しでもよくしてもらいたくて、看守に渡す酒の一升瓶を落とさないように持つのは自分の役目だった。とくさんが窓越しに弘幸さんの姿を見つけたのか、「あっ、ヒロちゃんが生きていた」と声を上げたことがあったが、美江子さんには見えなかった。

予定の期日に帰京できなかった時は、「無断で欠席した」として校庭に立たされた。人の視線が痛かった。

戦争が終わってやっと帰ってきた「お兄ちゃん」と対面した。結核にかかり衰弱していた。兄が潜り込んだ布団はペしゃんこで、人が寝ているとは思えないほどだった。そして47年2月、無念の死。

「スパイの家族」の汚名は、兄の死後もついて回った。いくつかの縁談があった。婚約まで決まったが、相手の親が「お兄さんは刑務所にいたことがあるんですね」と言い出して立ち消えになったこともある。

東京で会社勤めをしていた50年秋。弘幸さんを弔うため母と2人で網走に旅をした。帰途、文部省（現文部科学省）に勤めていた秋間浩さんと知り合った。2人は5年後に結婚した。東京の郊外でひっそり暮らした。だが、暗い記憶が頭から離れることはなかった。

65年に浩さんが米商務省に技官の職を得た時は「救われた気がした」。一家で米西部コロラド州ボルダーに渡った。ロッキー山脈ふもとの町だ。もう「スパイの家族」と呼ばれる心配はない。米国籍を取った。日本国籍を捨てることで、「兄の記憶をコンクリートで閉じ込めることができた」はずだった。あの日、1本の電話を受けるまでは……。

米国生活が20年を超えた86年のことだった。未明に自宅の電話の呼び出し音が鳴った。「朝日新聞のヤブシタ」と名乗る相手は「お兄さんのことを聞きたい」と言った。心がざわついた。

電話の主は朝日新聞編集委員の簀下彰治朗さん（故人）だった。東西冷戦下の当時、自民党がスパイの取り締まりを強化するために、前年に廃案になった国家秘密法案を再提出する準備を進



宮沢家の人たち。左から美江子さん、父雄也さん、弘幸さん、晃さん、母とくさん。弘幸さんが北大予科時代の1938年1月撮影



在りし日のハロルド（右）、ポーリン・レーン夫妻。戦前に撮影された（いずれも山野井さん提供）

めていた。簀下さんは法案の危険性を訴える記事を書こうとしていた。取材の過程で、北大を舞台にしたレーン・宮沢事件を知った。限られた資料を読み解き、軍機保護法が定める「秘密」が拡大解釈された末の「冤罪（えんざい）」と確信するようになったという。

簀下さんは続けた。「いま、あなたが話さなかったら、誰も話す人がいないんですよ」。簀下さんの妻令子さん（81）は「日本中を回ってもなかなかしゃべってくれないんだ、とよくこぼしていました」と振り返る。戦争中のスパイ事件の証言者をようやく見つけても皆、「国賊」「非国民」

という当時の烙印（らくいん）にいまだにおびえていた。

確定判決の重さからいえば、レーン・宮沢事件は、2人が刑死したゾルゲ事件（41年）に次ぐスパイ事件だった。だが、簀下さんは「つくられた事件」と言った。当事者の関係者で存命中なのは美江子さんぐらいしかいなかった。心の中のコンクリートの壁にひびが入った。

美江子さんは久しぶりに日本に戻り、取材を受けた。兄の事件を解明してほしい気持ちがある一方で、ためらう気持ちがどこかにあったという。

レーン・宮沢事件の記事がいくつかのメディアに掲載された。弁護士ら有志の人たちが調査に乗り出した。弘幸さんが米国人のレーン夫妻に漏らしたとされる軍港、飛行場などの「秘密」はどれも地図に掲載されていたり、絵はがきとして販売されていたりするなど一般に知られた話で、後付けで「秘密」とされたことが明らかになった。世論も「秘密」の危うさをかき取った。戦争の記憶がまだ風化していなかった頃だった。結局、自民党は国家秘密法案の再提出を断念した。

戦後、事件との関わりを避けていたのは、ハロルドとポーリン・レーン夫妻も同じだった。

ハロルドさんは20年代初め、北大予科に英語教師の職を得て札幌に来た。宣教師の家に生まれ家族と札幌に住んでいたポーリンさんと結婚し、2人で教壇に立った。日米関係が悪化して戦争の影が迫る中、周囲から帰国を勧められてもとどまった。毎週金曜日の晩、官舎を学生たちに開放し、英語で会話を楽しんだ。

弘幸さんは夫妻を慕い、足しげく通った一人だ。そして運命の日米開戦の日、3人は特高警察に連行された。翌日の地元紙には「スパイ網一挙に覆滅」の見出しが躍った。

43年春に確定した判決は、弘幸さんとハロルドさんが懲役15年、ポーリンさんは懲役12年。ただレーン夫妻については同年9月、抑留者を引き渡す最後の日米交換船に乗って帰国した。

レーン夫妻は戦後、51年春、北大に招致されて再び日本に戻った。2人はまず東京へ足を運んだ。宮沢家を訪ねるためだった。

美江子さんは、2人が抱えた「大きな白い花束」が強く印象に残っている。けれども母とくさんは2人を家に上げなかった。「ああ、レーンさんですか、お帰りください」。

息子は2人のいいかげんな供述で重罰に巻き込まれたと固く信じていた。事件はともに苦しみを負わされた人たちのつながりをズタズタに切り裂いていた。失意をあらわに帰って行く夫妻を、美江子さんは追いかけた。

英語で話しかけると、ハロルドさんが日本語で答えた。「ウソ、イイマセンデシタ。ウソ、カカレマシタ」。日本語で懸命に、捜査当局による調書の捏造（ねつぞう）を訴えた。だが、美江子さんも当時、その言葉を心から信じられなかった。そのことを今も悔やんでいる。

夫妻は戦後も札幌の学生たちを家に招いた。しかし、当時の学生たちは「スパイ事件の話など聞いたことがない」と話す。戦後の教え子たちの多くは、夫妻が亡くなってから事件のあらましを知ったという。

ハロルドさんは63年に70歳で、ポーリンさんも後を追うように3年後に73歳で亡くなった。事件のことについては沈黙を守った。

美江子さんは夫妻の心を推し量る。「思い出しなかったんじゃないかしら。誰だって、そんなこと……」

ただ、ポーリンさんが、封印してきた一片の記憶を明かした相手がいた。札幌市西区に住む今村美代子さん（97）だ。

美代子さんの夫勝弘さんは戦前、ハロルドさんから英語を学び、夫妻から「今坊（いまぼう）」と可愛がられた。陸軍大学校を出て情報将校となり、戦後まもなく病死した。女手一つで4人の子を育てる美代子さんは、夫妻から衣類を贈られるなど支えられたという。

ポーリンさんが晩年、乳がんで入退院を繰り返していた頃、美代子さんと呼び寄せ、ある秘めていた話を伝えた。43年、日米交換船に乗るため北海道の刑務所を出て横浜に向かう途中、勝弘さんに世話になったというのだ。

青函連絡船で青森に着いた時、たまたま乗り合わせた勝弘さんが夫妻の元に駆け寄った。ハロルドさんは髪が真っ白になり、ひどく衰弱していた。上野に向かう列車に乗る前、勝弘さんは乗務員に身分を明かし「恩人だから、私の寝台で休ませてやってほしい」と申し出た。横浜の港で船に乗ると、岸壁から勝弘さんが敵であるはずのレーン夫妻にずっと手を振ったという。

「レーンのおばさん（ポーリンさん）は戦時中のことは絶対口になさらなかった。差し障りがある人が出てくると考えていたのでしょう。体が弱って最後に私には話しておきたいと思ったのでは」

◇「一人でも多く伝えたい」

あの時代、レーン夫妻の周囲ではほかにも不可解な「弾圧事件」が起きていた。当時のカトリック教会で札幌教区長だった戸田帯刀（たてわき）神父の事件もその一つ。

プロテスタントだったレーン夫妻が捕らわれた後、札幌市内にあったカトリック病院の看護師たちが、教義を超えてハロルドさんの父らの面倒を見た。責任者の戸田神父の判断とみられる。翌42年3月、その戸田神父が特高警察に連行された。軍刑法違反容疑だった。同僚を前に戦況の悲観論を語ったことが「造言飛語」の罪に問われた。3カ月後、無罪判決を受けた。その後、横浜教区長に転じたが、終戦3日後の45年8月18日に何者かに射殺された。

戸田神父をよく知る聖園（みその）イグナチア（旧名・大橋道子）さん（102）が新潟市内で療養生活を送っている。19歳の時、東京・麻布の教会で洗礼を受け、そこで会った10歳ほど上の戸田神父を兄のように慕っていた。「真っすぐ



北海道大での講演会で、美江子さんは当時の話を
思い起こし涙が止まらなくなった
＝札幌市北区で5月6日、青島顕撮影

で聡明（そうめい）で、思った通りをおっしゃる方でした」。誠実であるがゆえに平穏に生きられない時代だった。

造言飛語罪に当たるとされたのはく今こそ日本が戦争に勝っているが、米英は強国だから将来はどうか分からない」という発言だった。自分の考えを述べただけだが、その法を扱う者たちの胸三寸で黒白が分かれる。その構図はレーン・宮沢事件と同じだ。そして、戸田神父の受難もやはり、忘れ去られている。

特定秘密保護法が今年中に施行される。政府の決めた「特定秘密」を漏らしたり、不正に取得したりした者に最長懲役10年を科すというものだ。安倍晋三首相は昨年12月、法の成立を受けた記者会見で「一般の人が巻き込まれることはない」と繰り返した。

弘幸さんやレーン夫妻が罪に問われた改正軍機保護法が成立した1937年当時も、政府は国会審議で「不正手段をもっての秘密収集を罰するの意味であります」と述べ、仮に軍事秘密であってもたまたま知った程度なら罰せられないことを強調していた。その後、法律はどう運用されたか。

美江子さんの父雄也さんは56年に亡くなり、母とくさんは82年、移り住んだ米国で死去した。事件について語ろうかどうか迷っていたときに背中を押してくれた夫の浩さんは96年に他界した。事件の最後の生き証人となり、1人で異国に暮らす美江子さんは、秘密保護法が成立したと聞き、今年2月、弘幸さんの命日に合わせて来日、集会などに出席した。「聞くことも自由で話すことも自由。そんな国になってほしいから」。けれども閉じ込めてきた記憶を引き出して語るたび、心も体も痛めてしまう。がんの手術を5度経験し、心臓の調子もよくない。命を削って、自身の体験を訴えているように見えた。

帰国の日が訪れた。5月20日、成田空港の薄暗い出発ロビー。「また来るからね」。美江子さんは車椅子に乗ったまま、友人たちの肩に一人一人手を回した。何度も投げキスをしていた美江子さんの姿が空港の壁の向こうに消えた。見送りに来た友人の山野井孝有（たかゆき）さん（82）が、不意に顔を右手で覆った。「また来る」という美江子さんのけなげな言葉が胸に迫ったのだ。

今月12日夜、米国の美江子さんから電話があった。「どうしてももう一度日本に行きたい。一人でも耳を傾けてくれる人と会いたい」。声に張りが戻っていた。

弘幸さんらの名誉回復を求める声はある。しかし、終戦時の混乱で捜査、裁判資料のほとんどは処分されている。

◆今回のストーリーの取材は、

青島顕（あおしま・けん）（東京社会部）

1991年入社。西部本社整理部、佐賀支局、福岡総局、水戸支局次長、内部監査室委員などを経て、2011年4月から社会部で特定秘密保護法などを取材している。



＜宮澤家の人々＞

宮澤さん一家。右から、とく、晃、弘幸、雄也、美江子さん。宮澤弘幸さんは、1937年4月に北海道帝国大学予科に入学しているので、迎えた1938年正月に撮影されたのではないかと思います。家族全員がそろった写真は、ほかには見当たりません。

宮澤雄也さん 1890(明治23). 1. 25～1956. 4. 14

宮城県出身、旧伊達藩士の血筋を引く。工学院から早稲田大学を出て横浜電線、ほどなく藤倉電線(1885年創業の大手)へ。社長に見込まれてドイツへ留学。技術畑で実績を上げ、敗戦前後には藤倉電線富士工場の工場長でした。戦後定年退職。子会社・弘電社社長を務めました。享年65。

とくさん 1895(明治28)7. 21～1982.

父親は近江商人の血を受け継いで、横浜で生糸を扱って成功した松浦吉松さん。戦後のとくさんは、貸本屋をはじめ現金収入の得られるものなら何でも取り組む才気煥発でした。老後、浩・美江子さんが住むボルダーに近いデンバーに移住し死去。享年86

弘幸さん 1919(大正8). 8. 8～1947. 2. 22 享年27

雄也、とくさんの次男(長男は0歳で夭逝) 豊多摩郡代々幡175(現在の代々木あたり)生。1932年山谷小学校(小田急線・参宮橋そば)、東京府立第六中学校(現・新宿高校)入学。2年～5年級長、5年間皆勤。器械体操、水泳、柔道初段。英・国・数の成績良く5年間通し250人中5～18番。学籍簿に「志操堅固」。また幼少から弟妹一緒に英語の個

人教育を受け、読書好きで快活でした。1937年府立六中卒。第一高等学校理科甲類受験失敗。北大予科甲類合格。全学的学友会「文武会」理事。1938年フォスコ・マラーニと出会う。1939「ソシエテ・デュ・クール」参加。1940北大工学部電気工学科へ進学。1941.5満鉄月刊誌「満鉄グラフ」に「大陸一貫鉄道論」載る。同月、千葉県習志野の陸軍戦車学校の機械化訓練講習会に参加。6月海軍依託学生試験合格、月45円の手当受給。そして12月8日……。

晃さん 1924(大正13). 3. 31～1964.

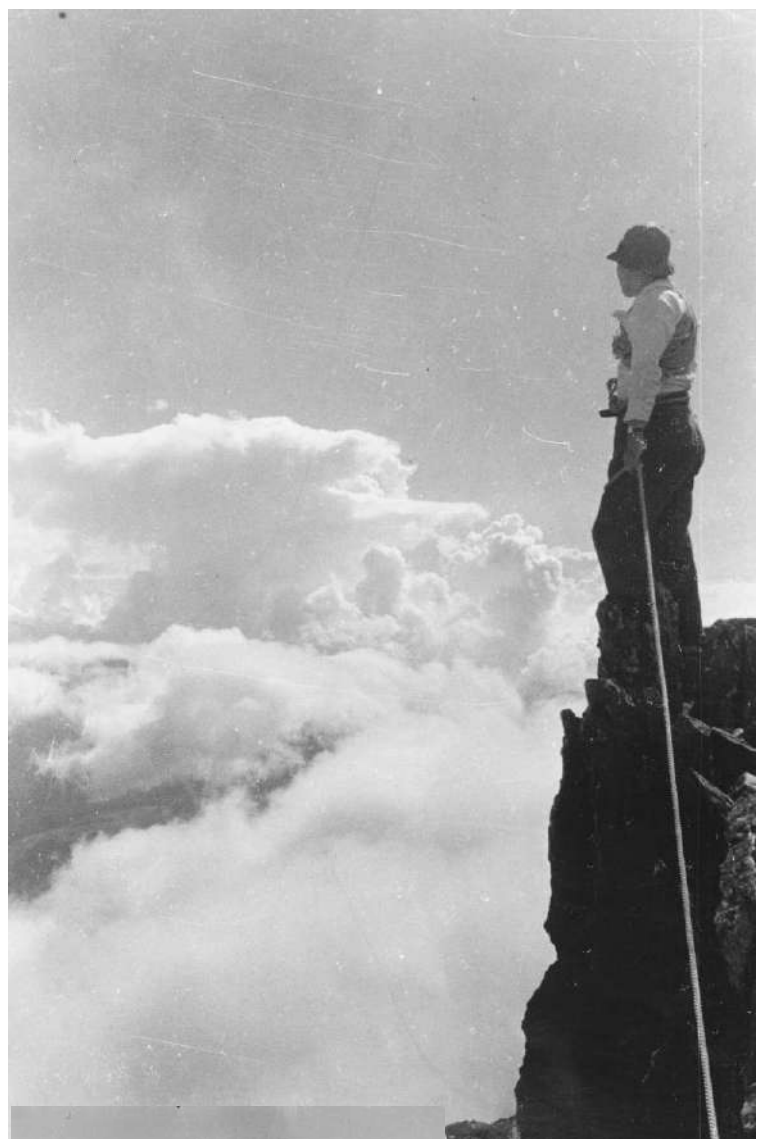
慶応義塾大学から学徒動員で海軍航空隊パイロット。前年1943.10.21、明治神宮外苑競技場での出陣学徒壮行大会で在校学徒代表として「壮行の辞」を述べる予定が弘幸の弟と知られ外される。戦後復学して藤倉電線から三井物産へ。長崎原爆直後、被災調査の上空飛行で被爆し白血病に。1964死去。享年40

美江子さん 1927(昭和2). 1. 27～2020. 10. 25 享年93

大妻女子専門学校から津田塾で学ぶ。戦後、兄弘幸を慰労する旅の途中、阿寒湖で秋間浩さんと出会い、のち結婚。浩さんの転職でアメリカ中西部コロラド州ボルダーへ移住しました。

宮澤弘幸さんの青春

秋間美江子さんから山野井さんに届いた鮮明な写真



北海道を訪問した秋間さん夫妻



1985年6月、通常国会に「国家秘密に係るスパイ行為等の防止に関する法律案」（スパイ防止法）が上程され、反対運動が急速に盛り上がった。この法案は廃案となったが、引き続き策動は続いていた。来日してそれを知った秋間浩さんは、上田誠吉弁護士に手紙（1986年11月9日付）を送り、「スパイ防止法」への不安と、妻・美江子が宮澤弘幸の妹であることを伝え、宮澤事件の解明を要請した。これが契機となって、秋間夫妻は国家秘密法反対のために、何度も来日して集会などで訴えた。

2013年、秋間美江子さんから山野井孝有さんに手書きの説明がついた写真が届いた。日付はなかったが、上田誠吉弁護士はじめ関係者たちとの当時のさわやかな交流の様子が伝わってくる。

美江子さんのメモによると、上の写真は、左から郷路征記、上田誠吉、秋間浩、美江子、小沢保知、鎌内恵子、当時の北大総長のみなさんと書かれている。



秋間美江子さんの献身と苦悩を思う

山野井 孝有（毎日新聞終身名誉職員）

秋間美江子さんと私の関係について、少し詳しく記しておきたいと思います。「スパイの家族」の汚名を胸に秘めて、出会う人すべてに献身的に援助した素晴らしい生き方を讃えるとともに、汚名をそそいてあげることが出来なかったお詫び、そして私と家族への限らない友情に心からの感謝を込めて――。

秋間美江子さんとの出会い

秋間美江子さん（以下美江子さん）と出会ったのは、息子・泰史の登山事故が契機だった。以前に発行した『五分五分―山野井泰史・妙子の“いのち”に向き合っている』（山と溪谷社刊『いのち五分五分』の元になった本）と、その後の活動記録などから要約して紹介したい。

1985年6月、アメリカ・コロラド州ボルダーからのコレクトコールの電話が鳴った。泰史と一緒に登山していたTさんからの事故の一報だった。数時間後、アメリカから女性の声で日本語の電話が入った。それがボルダー市内の病院でボランティア看護婦をしていた秋間美江子さんだった。連絡を受けた美江さんは病院に駆け付け、ベッドで足を吊った泰史に、「父親は？」「連絡先は？」と聞いたが、泰史は「連絡しないでくれ」と。「では誰が治療費を払うのか」と聞くと「これ以上親に迷惑をかけたくない」と言った。そんなやり取りが何回か繰り返された末、ようやく親に連絡することをOKしたという。

泣く泰史を説得してOKを取り付けた上で、「あなたは山野井泰史の父親か」「あなたはどこに勤めているのか」「役職は」と、まるで警察の尋問のような口調だった。私は「泰史は私の息子です。勤め先は毎日新聞社です……」と答えた。続いて、「治療は『応急処置』『後遺症が残るが杖を使って歩く程度まで』『完全に歩行ができるまで』の3段階があるが、このうちどの程度の治療を受けますか」と、日本では考えられない質問が続いた。私は「治療費は私が責任を持ちます。最善を尽くしてください」と電話に向かってひたすら頭を下げた。

美江子さんのおかげで、泰史の手術、治療はスムーズに進み、しばらくは入院と決まった。泰史の右足の骨折は複雑骨折だった。入院費用は1日10万円もかかるため、美江さんは自分の家に引取り、1ヵ月以上にわたって病院の送迎などの世話をしてくれた。美江子さんは、どの日本人に対しても親切に接していたが、「泰史君は自分の身内のような気がする」と好感を抱

いてくれたようだった。

ボルダーは標高1655メートルの高地で、有森裕子さん、高橋尚子さんらが高地トレーニングをしたことなどで有名になり、日本の有名企業所属の選手も訪れるようになった。強化合宿では、病人や怪我人が出る。こうした時、美江子さんは地元の病院で診察と治療を受ける日本人の世話をしていた。ところが医療費を払わないで帰国してしまう日本人がいるとのこと。そんな時、病院は美江子さんに催促するという。美江さんが日本を訪れる際には、泰史の面倒をみていただいたお礼に私の家にも来ていただくが、私の家から超有名企業に未払いの治療費を支払うよう電話をすることがあった。詐欺みたいな行為をして恥じない超有名企業があることは驚きだ。それを知った以後は、美江子さんの善意を踏みにじっている超有名企業のチームや選手が、たとえオリンピックでメダルを手にしたとしても、私はそれに万歳する気持ちは起こらない。

「スパイの家族」を胸に秘めて

秋間美江子さんとはどのような方だろうか、との思いを抱いた時、「新宿にある常圓寺に行って、住職の奥様に会ってほしい。そしてそこに兄のお墓があるのでお線香をあげていただけないでしょうか」との電話があった。

早速、私とかみさんは新宿の常圓寺に行き、美江子さんの兄上のお墓にお参りした。お墓で手を合わせるかみさんの写真と「お世話になっています」との手紙を添えて、美江子さんに送った。この時初めて、美江子さんの兄・宮澤弘幸さんのことを知った。

美江子さん（旧姓・宮澤）は、1942年、横浜の商家に生まれ、比較的豊かな生活を送っていた。その宮澤家に悲劇が訪れたのは、日本が米英等を相手に戦争を始めた1941年12月8日だった。この日、開戦を報道するラジオ放送の数時間後、美江子さんの兄で北海道帝国大学（現在の北海道大学）の学生だった宮澤弘幸さんは、スパイ容疑で特高警察に検挙された。弘幸さんは優秀な学生で「大陸一貫鉄道論」を発表、さらに「満鉄電化論」の執筆を準備していた時期でもあった。

日本軍による南京大虐殺を報じるアメリカの新聞を見た弘幸さんは、「天皇陛下の軍隊がこんな残虐なことをするはずがない。全部デマだ」と受け付けようとしなかった。どちらかと言えばこの時代のごく当たり前の愛国青年であった。

弘幸さんは外国人の英語教師と親しくしていた。開戦と同時に外国人はみなスパイとみなされる時代だった。弘幸さんは札幌地裁で軍機保護法違反とされ、懲役 15 年の判決を受けた。大審院に上告したが棄却され、刑が確定し、厳冬の網走刑務所で獄中生活を送った。15 年の懲役は、戦時下の国家機密法関係ではゾルグ事件に次ぐ重い刑と言われた。東北本線の列車で網走刑務所に護送された時は、編み笠をかぶせられ麻縄で縛られ、草履姿だった。母親は浩幸さんと同じ車両に乗って、離れたところから網走まで子どもの姿を見守っていた。その間、一言も話すことが許されなかった。おそらく暖かいお茶一杯でも自分の子どもに与えただろう。

弘幸さんはその後、宮城刑務所に移され終戦を迎えた。しかしすぐには釈放されず、2ヵ月後の 10 月 10 日、出所した。刑務所から出たときは栄養失調と肺結核で衰弱し、母親が持参した草履を履くことも出来なかったという。そして「真実は必ず書く」と言っていたが叶わず、1947 年 2 月 22 日、27 歳で亡くなった。

美江子さんのもう一人の兄で、弘幸さんの弟、晃さんは慶応大学在学中に学徒出陣した。1943 年 10 月 21 日、明治神宮競技場で催された雨中の出陣学徒壮行会では東條英機首相兼陸相が閲兵した。その壮行会で出陣学徒を代表して決意を述べるようになっていた晃さんは、兄が「スパイ」と分かり急遽交代させられた。そして晃さんは戦闘機のパイロットになった。長崎に原爆が投下された長崎の上空から調査するために何度か長崎の上空を飛行したことが原因で被曝した。戦後商社に勤めたが、1964 年に白血病で亡くなった。美江子さんは弘幸さんと晃さんの二人の兄をあの戦争で亡くしていた。

秋間浩さんと出会う

1945 年、終戦を迎えたが、世間は宮澤さん一家を「スパイの家族だった」と白い目で見ていた。年ごろを迎えた美江子さんはかなり肩身の狭い生活を送っていた。そんな美江子さんに手を差し伸べたのは、母と一緒に兄を偲んで網走に行った後、阿寒湖で出会った秋間浩さんだった。浩さんは、美江子さんが「スパイの妹」であることを知った上で、「美江子は俺が守る」と言って結婚した。

秋間浩さんは、1925 年東京生まれ。東京府立一中、一高を経て、1947 年東大第二工学部電気工学科卒（後年、北大に入学した宮澤弘幸も工学部電気工学科だった）。同年文部省電波物理研究所勤務、後に郵政省電波

研究所勤務となり、1965 年、アメリカに移住し、アメリカ商務省ボルダー研究所勤務となり、数々の研究成果を上げた。美江子さんが「スパイの家族」の汚名から逃れたボルダーで、ボランティア活動をし、多くの日本人のホームステイを受け入れ、面倒をみることでできたのは、秋間浩さんの理解と支援があったからだ。

宮澤弘幸さんの冤罪事件を訴える

宮澤弘幸さんは、「スパイ」とされて取り調べ中「退学届」を書いた。北大側は自主的に書いたものを受理したとしているが、書くよう強制された疑念が残っている。そして前述のように懲役 15 年が確定して網走刑務所に収監された。

この事件を知った藪下彰治朗・朝日新聞記者と自由法曹団の上田誠吉弁護士が真実を明らかにし、汚名を晴らすために調査活動を始めた。1980 年代、政府・自民党は「国家秘密法」制定を策動していた。これに危機感を抱いた藪下記者は朝日新聞に「スパイ防止法ってなんだ」を連載し、上田誠吉弁護士は「戦争と国家秘密法」を出版して訴えた。

この時、たまたま帰国していた秋間浩さんはこれらを読んで危機感を持った。アメリカに戻ると上田誠吉弁護士に宮澤さんの事件調査を要請する私信を送り、美江子さんにも事の重要性を話した。

ボルダーで穏やかな日々を過ごしていた美江子さんは、浩さんの訴えで、兄の無念がよみがえってきた。そして日本からの訴えに応じて、国家秘密法反対のために何度も来日した。1987 年 7 月 9 日に札幌で開かれた「国家秘密法に反対する市民集会」では、満員の聴衆に、兄の事件と苦難を訴え「私のような悲しい家族を二度と作らないよう、みなさん頑張ってください」と訴えた。また当時は、マスコミも一致して「国家秘密法反対」で足並みを揃えて徹底反対した。

こうした全国民的な運動とマスコミの奮闘によって、政府自民党は国家秘密法制定策動をいったんは中止した。しかしながら政府・自民党は水面下で策動を継続していたのであった。

一方、戦後ずっと伏せられていた「宮澤弘幸スパイ冤罪事件」が明かになったにも関わらず、北海道大学は一切無視を貫いていた。同じ時期、同じ容疑で検挙され懲役刑が確定しアメリカに送還された北大英語教師のハロルド・レーン、ポーリン・レーン夫妻は、大学あげでの運動によって再び北大に復帰して教育を再開し、事実上名誉が回復された。

北大に名誉回復を求める運動

時は過ぎて、2012 年秋、来日した美江子さんは私の自宅に来た。思い詰めた表情で「これまで 71 年間、『スパイの家族』として生きてきたが、私も 85 歳、兄・弘幸が遺したアルバムを北海道大学に寄贈して区切りを

つけたい」と涙を流しながら語った。そして同年 10 月 24 日、北海道大学を訪問して、アルバムを寄贈した。同行した私は「秋間美江子さんの本音は、兄・弘幸さんの退学を撤回し、名誉を回復して欲しいということだ」と、北大に強く申し入れた。この申入れ後、東京の常圓寺で、美江子さんも参加して「報告集会」を開催した。（「北海道大学訪問報告会」、「秋間美江子さん、北大にアルバム贈呈」、の写真と記事を参照）

これが契機となって、2013 年 1 月、札幌で「北大生・宮澤弘幸『スパイ冤罪事件』の真相を広める会」が発足し、私と山本玉樹さんが代表に就いた。この会は「宮澤弘幸さんの退学撤回による名誉回復と、秘密保全法（のちに特定秘密保護法）の立法策動を阻止すること」を目的とした。

早速、2 月 26 日、山本代表と一緒に北大を訪問して「名誉回復と謝罪」を申し入れた。しかし応対した総務課長補佐は、物置室のような部屋に案内し、黙って受け取っただけだった。しかしながら北大内部では無視できないと判断したのか、美江子さん宛に 5 月 27 日付で、「故・宮澤弘幸氏に係る件について」と題した文書を送付してきた。さらに、6 月 25 日、「真相を広める会」代表・幹事に説明すると回答した。そこでは、北大が退学処分にしたのではなく、本人からの退学願を受理したのだという責任逃れの言い分を批判し、引き続き名誉回復を求めた。

一方、安倍政権は秘密保全法策動を公然と開始した。これに危機感を抱いたマスコミは、宮澤・レーン・スパイ冤罪事件について、秘密保護法が制定されれば起こる事件の事例として注目して報道した。「真相を広める会」が東京と札幌で開催した集会には、美江子さんがボルダーから熱いメッセージを送ってくれた。

こうした運動にも関わらず、特定秘密保護法は、2013 年 12 月 6 日に成立した。しかし運動の中でこの法律の危険性が広がったため、現実には秘密保護法による弾圧事件は、まだ引き起こされていない。

美江子さんは、2014 年 2 月 22 日、常圓寺で開催された「宮澤弘幸・追悼顕彰 2.22 のつどい」に出席し、再び「みなさん、頑張ってください。私みたいな人間を再びつくりたくないために」と訴えた。（「宮澤弘幸追悼・顕彰のつどい」写真参照）

一方、北海道大学は、美江子さんの訴えとそれに応えた北大OBはじめ多くの人々の力によって、宮澤・レーン・スパイ冤罪事件を無視することができなくなってきた。

美江子さんが出席した、2014 年 5 月 7 日の交渉で、三上隆・北大副学長は「宮澤事件は冤罪であった。宮澤弘幸を顕彰し次代の学生にその精神を伝えるために『宮沢賞』を創設する」と回答した。（「北海道大学と

の交渉」写真参照）

美江子さんの生き方に思うこと

秋間美江子さんはアメリカに渡るとすぐにボルダーの病院にボランティアとして働いていた。数年前、美江子さんから「病院から 50 年間ご苦勞様の感謝状が渡された」と嬉しそうに電話があった。

病院でのボランティアを続けながら日本人の語学留学の若者の面倒を見てきた。その数は千人を越えると聞いている。その若者たちの多くはその後、政界や企業家として新聞に名が出る面々だ。

コロラド大学があるコロラド州ボルダーは、アメリカの中でも一番と言われるほど安全な街だ。秋間さんは日本に来られる時もカギを掛けたことがない。これが日本の裕福な家庭の子弟が語学留学として押し寄せ、それを口伝えて聞いてさらに広がった理由でもある。

首相になった小淵恵三も、アメリカを放浪しているとき「困ったらコロラドのボルダーの秋間の家に行けば、しばらくは食いはぐれはない」と耳にして、秋間さんの家に転がり込んだ一人だ。

外務省は年に一回海外で活躍する日本人に感謝するため園遊会を開いていた。ただし旅費は自己負担。美江子さんもこの会には何度か参加していた。そのつど我が家に滞在していた。ある時の園遊会で「秋間のおばさんでは？」と声を掛けられた。一言二言話して別れた。その後、周囲の人に「あの人今何をしている人？」と聞くと「外務大臣です」と。秋間さんは「ボルダーではぼさとしていたおぶちゃんの外務大臣とはね！」とびっくりしていた。娘の小淵優子は父親が若い頃ボルダーで秋間さんにお世話になった話など知らないだろう。

秋間さんにお世話になった千人を越える人たちの多くが政界や経済界にしながら、なぜ新聞社の印刷工の私の家が定宿になったのだろうか？ その理由が後になって分かった。

私は「北大生・宮澤弘幸『スパイ冤罪事件』の真相を広める会」の代表になって、その活動を始めて間もない時期、美江子さんに「宮澤弘幸のスパイ冤罪事件を広めるため、日本で協力してくれる知り合いを紹介してほしい」とお願いした。美江子さんから「私がボルダーで面倒を見た人たちが「ボルダー会」を作っている。この人たちなら協力してくれるはずだと、その会の世話人を訪ねるように言われ事務局長の福島清さんと東京・神田駅近くにあるその方の会社を訪ねた。

「ボルダーの秋間美江子さんからの紹介だ」と自己紹介し、美江子さんの兄・宮澤弘幸スパイ事件のことで協力をお願いに来ましたと訪問の用件を話した。すると席を立てて戻ってきたとき茶封筒をもって現れ、「これで、お引き取りを……」の素振りだった。話の続きが断たれ「ボルダー会」の名簿を見せることも拒

否されてしまった。

千人を越えると言われている若者の面倒を見た美江子さんが来日しても「良ければ私の家に来て」と言葉かけの者がいないのはなぜなのだろうかと考えていた私は、神田駅前で会社を構えるあの社長の私と福島さんに対する対応で分かった。それは「スパイの妹との関わり合いはごめんだ」と思っているからだろうと。ボルダーでどんなに親切にされても、日本では「スパイの妹はごめんだ」という空気があるのだ。

美江子さんのご主人・秋間浩さんが「俺が美江子を守る」とアメリカに移住した決意がわかった。そして政界や経済界のお偉方の家でなく、我が家を30年間も定宿として親戚以上の付き合いをしてきた美江子さんにとっては、「スパイの家族」を忘れて心やすらぐ場所だったのだと思う。それは亡くなったかみさんも同じだと思っている。

でも、30年という長い年月、何事もなかったわけではない。我慢できないことも何度かあった。かみさんが亡くなる半年前だった。

朝ごはんを食べている時、かみさんが何気なく「お昼は何にしようかな？ 秋間さん何が食べたい」と聞くと、「朝ごはんを食べている時にお昼の話はしないで」とかなりキツイ口調でかみさんに言った。かみさんはテーブルから離れた。

ある朝、私は美江子さんにコーヒーを入れた。「あんた、この入れ方何なの！」とマグカップに3分の2入ったカップを指さした。アメリカではカップになみなみと注ぐものよ！私は黙ってコーヒーを継ぎ足した。こういう時の美江子さんは遠慮がない。それは私の家族だったからだとは今は懐かしく思っている。

美江子さんは、年に2、3回来日して2週間は滞在した。宿泊先は宮澤弘幸のお墓のある新宿・常圓寺が私の家だ。時には遠い親戚の埼玉県大宮に行った。私は「こんな狭苦しい家でなく、もっと広い立派な家がある知り合いがいるでしょうに」と当初よく話したことがあった。おそらく美江子さんをはじめは面倒を見たかつての若者たちが歓迎してくれると思ったようだ。だが、それは甘いと言われたようだ。

こんな事があった。我が家に来たはじめての頃、美江子さんは私の家から一流会社の人たちに電話をしていた。時には地方にも出かけた。みんなボルダーで世話をした若者たちの親元らしかった。その理由ははっきりとは言わなかったが、ボルダー滞在中の若者たちの面倒を見た時、経費の支払いを約束していたのに、支払わない親元に請求したのではないかと思った。それは約束を果たさない人に対する美江子さんのプライドだったのではないかと思う。

美江子さんについて、私には二つの役割があった。日本にいたときは気軽に滞在できるように。もう一つが美江子さんの兄の「スパイ冤罪事件」を広める運動

だった。その経過で、美江子さんに辛い思いをさせてしまったことがあった。それは宮澤さんが特高に検挙された前後のことで、美江子さんが兄・弘幸さんから聞いた証言に疑問が出されたことだ。美江子さんの証言に疑問を持たなかった私にとってもショックだった。しかし放置できないので、美江子さんに事実関係について「本当のこと聞かせて」と、会った時やボルダーへの国際電話で何度も聞いた。美恵子さんの答えはいつも同じだった。美江子さんと、疑問を提起した幹事との間で気まずい雰囲気にもなった。これは現在も氷解していない。

我が家に滞在していた時、美江子さんは「私は宇宙に行ってきた」と言い出した。その話には私は本気になって「そんなことできるわけないだろう」とむきになって話したことがあった。その場にいた泰史は、後で「オヤジむきになるなよ」と言われた。しばらくしてボルダーの美江子さんから宇宙服を着たボルダー市のポスターが送られてきた。何か子供のけんかのようになってしまったこともあった。

美江子さんの証言と幹事の疑問との間で、私が板挟みになっている苦悩を知った泰史に、「秋間さんの話は時には頭をかしげることもあるが、しかしそれが、スパイ冤罪事件を知らせる運動を進めるうえで障害になることはないだろう。そのことにあまりこだわることはない」と言われた。

美江子さんの生前にきちんとしておきたかったが、それは叶うことができなかった。「スパイの家族」とレッテルを貼られたまま亡くなった美江子さんの苦しみを解決できなかったことと合わせて、私の無念は消えることはないだろう。

＊

美江子さんの9月17日の最後の電話は、この追悼集の一面にあるとおりだ。「山野井さん今にも食べられなくなった。兄のことが新聞やテレビで大きく報じられ私は感謝しているのよ！ありがとう！そのことは是非言っておきたかったの。ありがとう」それから1か月後の10月25日娘のヒロコさんから母が亡くなった。と連絡があった。秋間美江子さん93歳スパイの妹として、日本ではなくアメリカの土となった。

＊

しばらくして秋間さんから預かっていた荷物を整理した。白い医務服があった。それは東日本大震災の時、10人のアメリカの医師団の通訳として仙台に2週間滞在中の時の医務服だった。滞在中、毛布1枚で過ごしたが、あまりにも寒いので知り合いから衣類を借りたと話していた。日本人の私と知人たちはこの大震災で何をしたらだろうか？

美江子さん、本当にありがとう！

新宿・常圓寺に眠るに宮澤弘幸さんの墓守はせめて私たちが続けたいと思っている。

<<<秋間浩・美江子さん一家との交流の記録>>>

コロラド州・ボルダーにて……………



秋間さんご一家と私の家族が出会ったきっかけは泰史がコロラドで登山中にケガをして、美江子さんにお世話になったことから。
左は退院後、面倒を見てもらった秋間さん宅で＝1985.7.3。右は帰国する泰史を見送ってくれた美江子さん＝1985.7.19、デンバー空港



毎日新聞を定年退職した際、泰史がお世話になったお礼をするために、孝子とボルダーを訪問した＝1987.4.8。

上写真の右端は長女・ヒロコさん。

右写真はボルダーの秋間さん夫妻の自宅前で
下の2枚は、美江さんとデート？



来日した美江子さんとの日々……………



「ガラスのうさぎ」の著者・高木敏子さん(右)を訪ねる＝2006



宮澤家菩提寺常圓寺(新宿)の大奥様(右)と



千葉県障害者自立センターの水本恵子さんと



美江子さんがアメリカの縄跳びチームを引率して来日。わが家は 20 数人を迎えて、大騒動になった＝19973.1.31



美江子さんと、長女・明子、孫の未来、幸久



美江子さんと友人を成田山に案内＝1997.9.23



美江子さんは来日のたびに新宿・常圓寺から千葉県多古市の日本寺に移られた住職ご夫妻を訪ねた＝2001.10.23

「ボランティア精神が服を着て歩いている」秋間美江子さん

坂本 和昭（帯広市・坂本ビル株式会社社長）

秋間美江子さんが10月25日の昼頃に亡くなられたとのメールを、秋間さんと親しい千葉の山野井孝有さんからいただいた。享年93であった。

秋間さんのことは、ブログに何度も書いてきたが、まさに「ボランティア精神が服を着て歩いている」という方であった。心からの感謝をこめて思い出を記して、追悼の言葉としたい。

秋間美江子さんとの出会いは、1995年2月のことであった。当時、帯広青年会議所（JC）で、地球環境問題に貢献する大学を十勝に造りたいと「国際環境大学構想」を提案したのであった。

この大学構想を推進するプロジェクトチームの担当副理事長として、コロラド州立大学のあるアメリカ・コロラド州のボルダー市にJCメンバー8名＋新聞記者で視察団を組んで訪問したのであるが、言い出しっぺの私が団長として赴いたのであった。

この時に、受け入れて下さったのが、ボランティア活動に熱心であったボルダー在住の秋間美江子さんであった。

ご主人の浩さんと美江子さんは、いわゆる日本からの「頭脳流出」である。東京オリンピックの映像を世界中に発信したテレビの「秋間システム」の開発者であった浩さん、フルブライトの第一期の留学生であった美江子さん夫婦はともに優秀なご夫妻であった。その優秀な頭脳をアメリカに流出をさせてしまったのは、日本人の差別であった。

秋間さん夫妻を苦しめた兄の冤罪

美江子さんの兄の宮澤弘幸さんは、第二次世界大戦時に北海道大学の学生であったが、かの悪名高き特高警察にスパイ容疑で北大の外国人教師のレーン夫妻とともに日本軍の真珠湾攻撃の日の1941年12月8日に逮捕されたのである。

逮捕容疑は根室の飛行場の存在を漏らしたというスパイ容疑であったのだが、これは既に新聞でも公表されていた衆人周知の事実であったのだ。スパイ摘発の手柄を立てたい特高がでっち上げた冤罪事件であった。

お兄さんは極寒の網走監獄に収監された。戦時中、美江子さんはお母さんと何度も東京から網走まで足を運んだという。終戦と同時に釈放されたが、外人教師も絡んだ冤罪事件であったから、占領軍に冤罪の発覚を恐れた官吏が証拠書類を燃やしてしまったがために、いまだに事件の真相は完全には明らかに出来ていないのである。酷い環境の監獄生活を送った弘幸さんは1947（昭和22）年2月22日に亡くなられたのであった。

しかし、その後もスパイの家族という白い眼でみられ続けた秋間浩・美江子夫妻は、いたたまれずに日本を離れてアメリカに渡ったのであった。この「宮澤・レーン事件」のことを美江子さんから聞いたのは、親しく家族同士のお付き合いをさせてもらってから数年後のことであった。

1995年2月の最初のボルダー訪問後には、秋間さんも何度も帯広を訪れてくれたし、私も家族を連れてボルダーを何度も訪問したりしたのである。妻は私以上に美江子さんと親しくお付き合いをさせてもらってきた。

「スパイの家族」晴らせぬ無念を思う

そんな中で、この事件の真相を明らかにして、二度と不幸な冤罪事件を起こしたくないという気持ちに共鳴した方々が大勢集まってきたのである。私も微力ながらお手伝いをさせてもらっている。

美江子さんに心残りがあるとすれば、この「宮澤・レーン・スパイ冤罪事件」の真相を明らかにしてお兄さんの名誉を回復させることであつたらう。

来年は事件から80年の節目にあたり、北大で展示会を開催する予定になっている。近年、美江子さんは癌で何度も手術を受けて体力が落ち、来日がままならなくなっていたが、この機会に北海道に来て展示会を見ることを望んでいた。

またお会いしたかったとても残念である。

衷心からご冥福を祈る（含掌）。

次ページは、家族と一緒にの写真も含めて、秋間美江子さんご夫妻との思い出の写真です。

<<<秋間浩・美江子さんとの交流の記録>>>



帯広青年会議所のボルダー視察団（９名）の団長として秋間さん宅を訪問してお話を聞いた。左から坂本和昭、秋間浩、秋間さん友人の大学教授、秋間美江子＝1995年2月、アメリカコロラド州ボルダー市の秋間浩・美江子様自宅にて。



長女・恵梨（えり）がコロラドスプリングス市で開催されたフィギュア・スケートの世界大会「ISU World Synchronized Skating Championship 2010」に日本チームのキャプテンとして出場するので応援に夫婦で渡米＝2010年4月8日、ボルダー市から応援に駆け付けてくれた秋間美江子さんと一緒にホテルのロビーで。



帯広青年会議所のボルダー視察団の帰路、デンバー空港まで見送りに来てくれた秋間美江子さん＝1995年2月9日。



応援にボルダー市から駆け付けてくれた秋間美江子さんと恵梨（えり）＝2010年4月10日



坂本和昭・友子の長女・恵梨（えり＝当時中学2年生）のフィギュア・スケートの大会がポートランド市で開催され、応援の為に家族でアメリカに行き、ボルダーの秋間さん宅を訪問、秋間美江子さんから「アメリカにスケート留学をさせなさい。私が面倒みてあげる」からとコロラドスプリングス市のオリンピック屋内スケート場に案内され、見学後に近くの和食レストランで食事をする坂本家族と秋間さん。左からレストランの職人、坂本和昭、秋間美江子、坂本友子、佳亮（けいすけ長男）、有理可（ゆりか次女）＝2000年8月10日、コロラド州コロラドスプリングス市の和食レストランで。



1995年2月に私がボルダー市訪問後、今度は秋間美江子さんがボルダーの友人を伴って帯広に来てくださった＝1995年4月7日、帯広の坂本和昭自宅前で。左から坂本和昭、ボルダー在住の秋間さんの友人、坂本友子、秋間美江子さん

秋間美江子さんを囲む夕べ

2012年10月23日 札幌

2012 年秋、秋間美江子さんは兄・宮澤弘幸さんの遺品アルバムを北海道大学へ寄贈する決意を固め、山野井孝有さんと一緒に札幌に赴いた。

前日の 10 月 23 日夕、秋間さんゆかりのみなさんが集まって、旧交を温めた。この夕べが翌年 1 月の「北大生・宮澤弘幸『スパイ冤罪事件』の真相を広める会」結成の端緒となり、2013 年の秘密保護法反対運動のスタートとなった。



＜参加者＞ 秋間美江子、山野井孝有、井上勝生（北海道大学名誉教授）井上高聡（北海道大学大学文書館）山本玉樹（北海道大学名誉教授）井上雄一（北海道新聞記者）岩本勝彦（弁護士）郷路征記（弁護士）庄司清彦（NHK記者）沼田勇美（北海道大学総合博物館）坂本和昭（坂本商事社長）夫妻、沼田勇美、刈谷純一（毎日OB）根岸正和（毎日OB）伊藤直孝（毎日新聞北海道記者）（敬称略・順不同）

＊

この日の「秋間美江子さんを囲む会」に参加してくれた北大関係者、弁護士、マスコミ関係者 16 人の一人一人の言葉から熱い思いがほとばしるのを私は感じた。「宮澤弘幸事件は過去の事件ではなく、これが始まりだ」と、それぞれの参加者が心のうちで誓っているのが私には分かった。

会の後、私たちが宿泊しているホテルに北大関係者、弁護士、友人がホテルのロビーにきた。秋間さんと遅くまで別れを惜しんで話は尽きなかった。

山野井孝有（「我慢できない、許せない」2012. 11. 12 から）

秋間美江子さん、北大にアルバム贈呈

2012年10月24日、秋間美江子さんは山野井孝有、山本玉樹両氏と一緒に北大を訪問。新田孝彦・副学長、白木沢旭児・教授、井上高聡・北大文書館員と会い、兄・宮澤弘幸の遺品アルバムを贈呈した。その上で、兄の退学処分の撤回と名誉回復を求めが、北大は「調査したい」と回答した。このアルバム寄贈は、北海道新聞、朝日新聞、毎日新聞、NHKが取材し報道した。



北大生・宮澤弘幸さんの悲劇を繰り返させないために **秋間美江子さん・山野井孝有さん 北海道大学訪問 報告会**

2012 年 11 月 12 日 新宿・常圓寺 新宿区西新宿 7-12-5 TEL:03-3371-1797



秋間美江子さんのご苦勞と北大訪問の経過を報告する山野井孝有さん



今もなお真相究明の活動を継続している山本玉樹・北海道大学総合博物館資料研究員



治安維持法国家賠償要求同盟中央本部の藤田廣登さん



「三鷹事件の真実にせまる」を上梓した元北大生の梁田政方さん



上田誠吉弁護士と調査にあたってきた藤原真由美弁護士



国民救援会中央本部の山田善二郎さん





秋間美江子さん



山野井孝有「真相を広める会」代表

宮澤弘幸 追悼・顕彰のつどい

悪夢を再来させる「秘密保護法」を許さない

2014 年 2 月 22 日

新宿・常圓寺



岸井成格さん
毎日新聞特別編集委員



戸塚章介さん
新聞 OB 九条の会事務局長



山本玉樹さん
「真相を広める会」代表



左＝宮澤弘幸のお墓にお参りする
秋間美江子さん

上＝140 人の参加者でいっぱいになった常圓寺の会場

秋間美江子さん
宮澤弘幸と家族の苦難を語る



秋間美江子さん取材インタビュー

協力・山野井孝有

聞き手＝森崎俊雄・毎日放送ラジオ局記者

2014年3月11日

赤坂・毎日放送ラジオスタジオ/福島 清

秘密保護法廃棄と宮澤弘幸の名誉回復を求める市民のつどい

2014.5.6 北海道大学学術交流会館



秋間美江子さん、北海道大学と初めて交渉

2014年5月7日



5月7日、午後2時から北海道大学の三上隆・副学長と「真相を広める会」と交渉が行われた。冒頭、秋間美江子さんが、兄・宮澤弘幸が遺した2冊のアルバムを追加寄贈した。宮澤弘幸の名誉回復要求に対して同副学長は「宮澤事件は冤罪であった」と明言し、次代を担う学生に宮澤弘幸の精神を伝えるために「宮澤賞」を制定すると回答した。このあと同大学内で記者会見して、北大との交渉経過を発表した。秋間美江子さんが、正式かつ直接、北海道大学に訴えたのは、これが初めて最後となった。



帰国を前に墓参する秋間美江子さん 2014年5月19日

